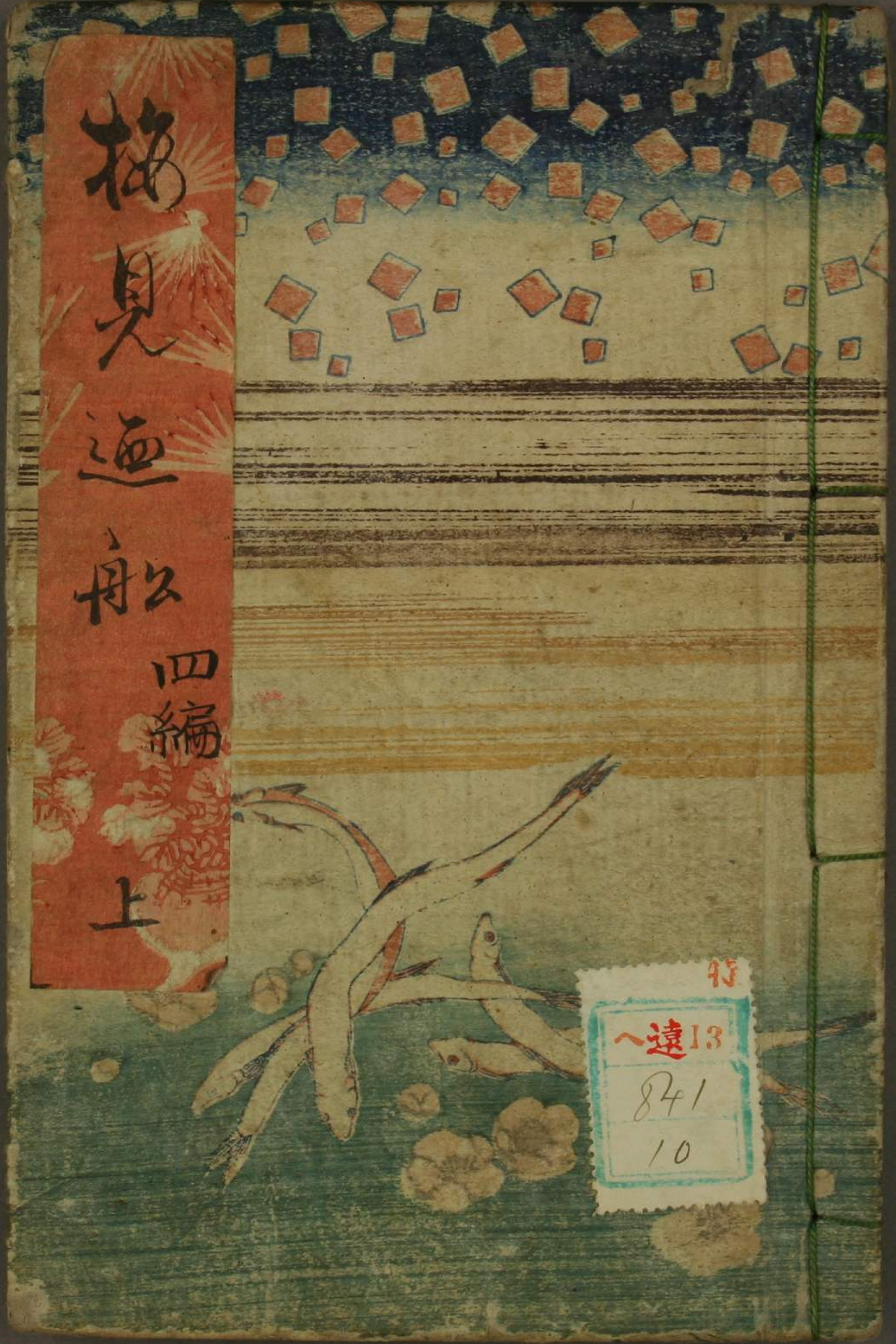




A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 13 14 15 17 18 19



梅見通舟
四編
上

特
~遠13
841
10

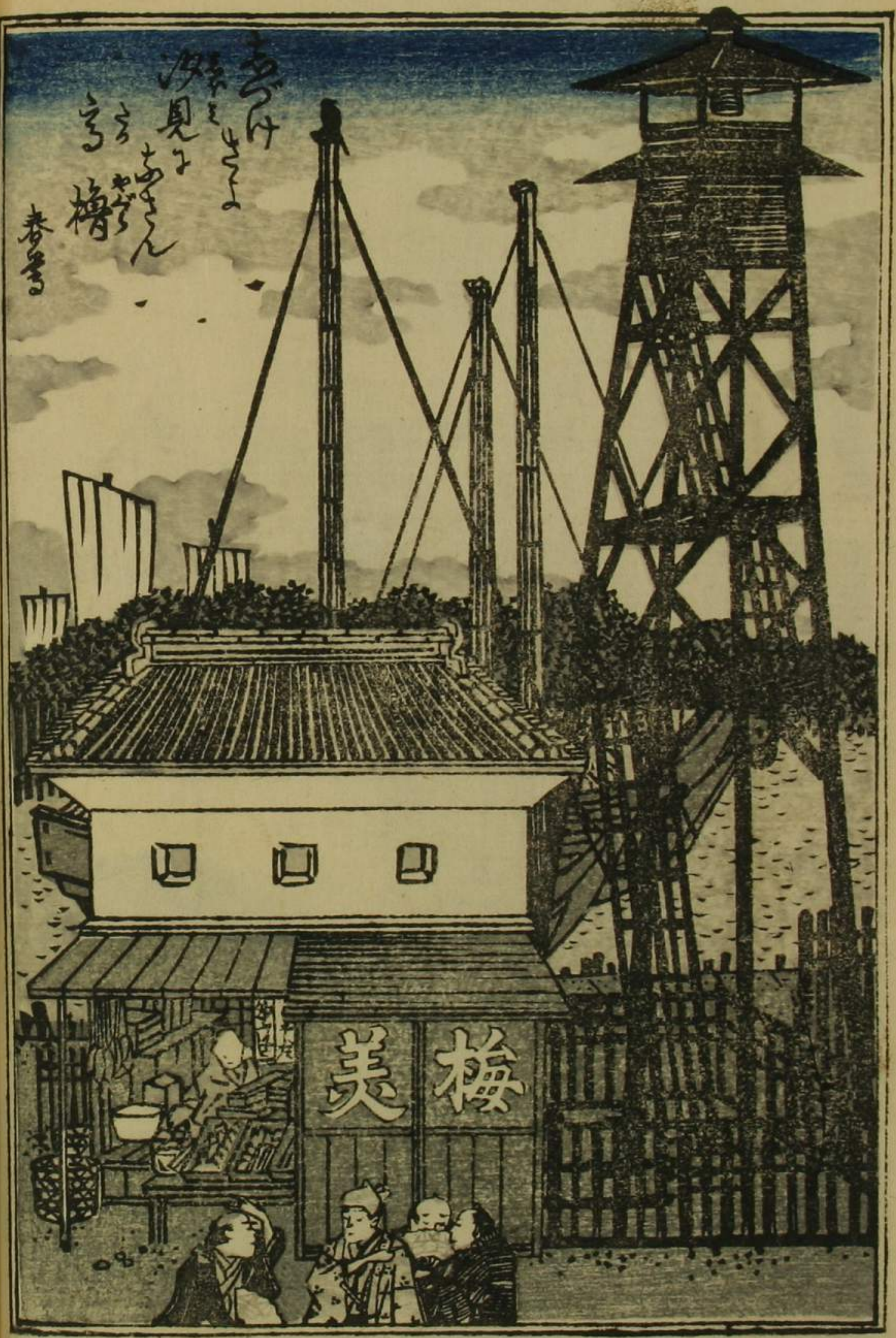


遠門 13
 番 841
 卷 10

明治三十八年
 十月十八日
 購求

序
 蓮池菴の主人近來一象乃
 文法を初て一家言數十部
 此の序は平旦の清く小其の
 的あり喜的あり悦的慈的





春色梅美婦祿卷之十

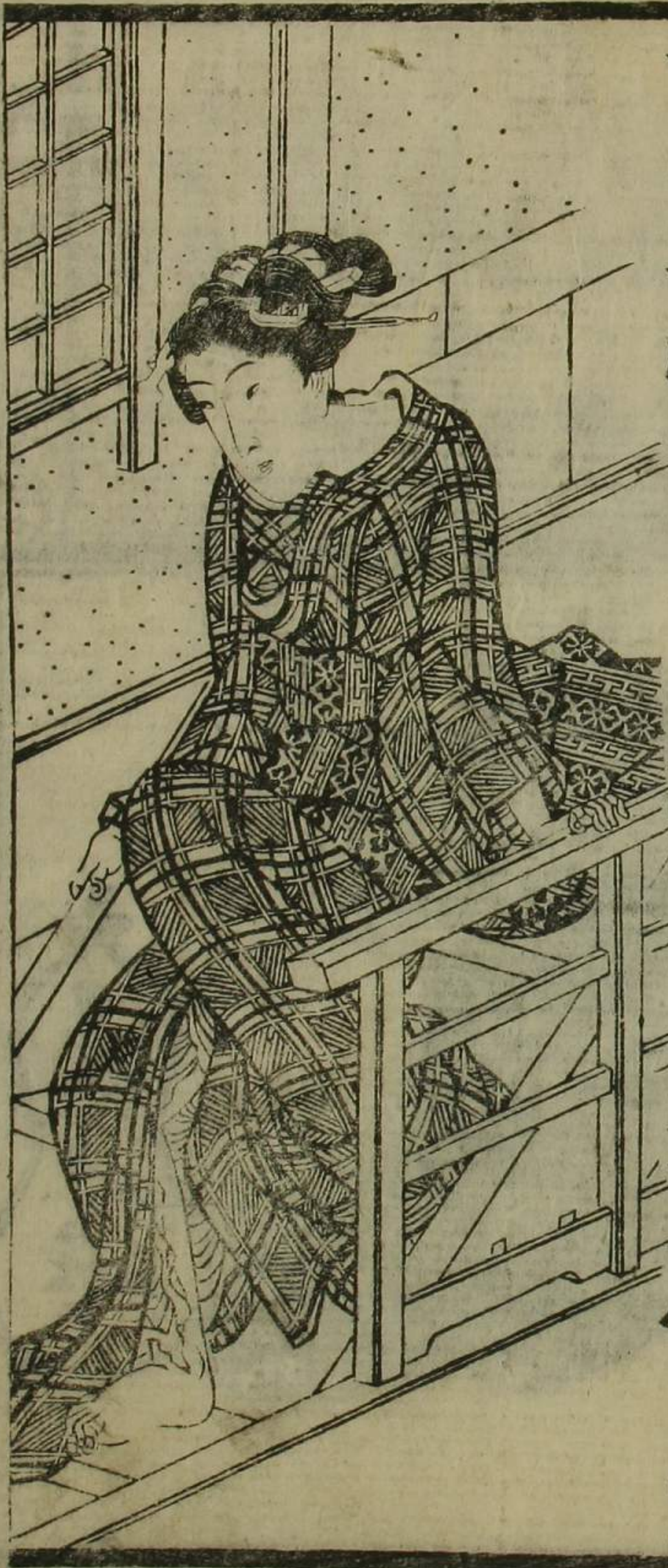
江戸 爲永春水著

第十九回

再説峯次郎の母親のお京と嫁とのお翁を囲ひ女の如
 きるも種々の厄死して縁者の人々を悦つけ亦峯次郎の
 父をも得公さる極めるせし無きと思ひしをうらむるも
 ながらも峯次郎が母と大切の孝行を父も母も一家業の
 りの由縁のゆゑと思ひし所は須く免前家内小腰と

極て家用へ帰る極ふされば何れも用の身分より私も
 此嬢もさへいぬぬむか他へ出さうとらうと五日も七日も家
 へ寄つてもけ方へさう来て居る月外の者の思ふも悪ひ
 ぞうろ私を世間へ交えて後ある家子の初を事一お京も
 可憐さまで於茶女よりさうけきども此嬢の公と汲りけて
 知りていふと思ひていふ峯次第が長居をせぬ極ふお京も
 くれ
 是つてもよとさるぬぬと私と思ひて居るけきどもお京も
 腹姉嬢さうお京よりお茶の方と本家へも入度極ふお京も
 くれ

けきども然まると私を極のり家初ら其方と一甲飛文が
 同ド縁者の娘でお茶もお京も私の方と其嬢のいふと
 方とも可憐お京もいふと私の方と其嬢のいふと
 くれ





此の時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

此の時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

此の時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

此の時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ



義太夫を多がるさるさるの
 新やあらうとて文句の
 りの物を見勢へ客が
 糸を汲みよき客の側
 見ての此時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

義太夫を多がるさるさるの
 新やあらうとて文句の
 りの物を見勢へ客が
 糸を汲みよき客の側
 見ての此時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

義太夫を多がるさるさるの
 新やあらうとて文句の
 りの物を見勢へ客が
 糸を汲みよき客の側
 見ての此時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

義太夫を多がるさるさるの
 新やあらうとて文句の
 りの物を見勢へ客が
 糸を汲みよき客の側
 見ての此時見世体なる
 客の三人連れの如く
 峯谷帝の婦の如く
 修を七降りしとぞ

再洗 ▲茶次郎の母 ▲母の 二階へて酒をくぐり女の子の
お茶の母 さき ごころ

こと茶次郎の身のうらみごころを合を居うら

下めて浴る障子を圍みぐる アヤおの許で

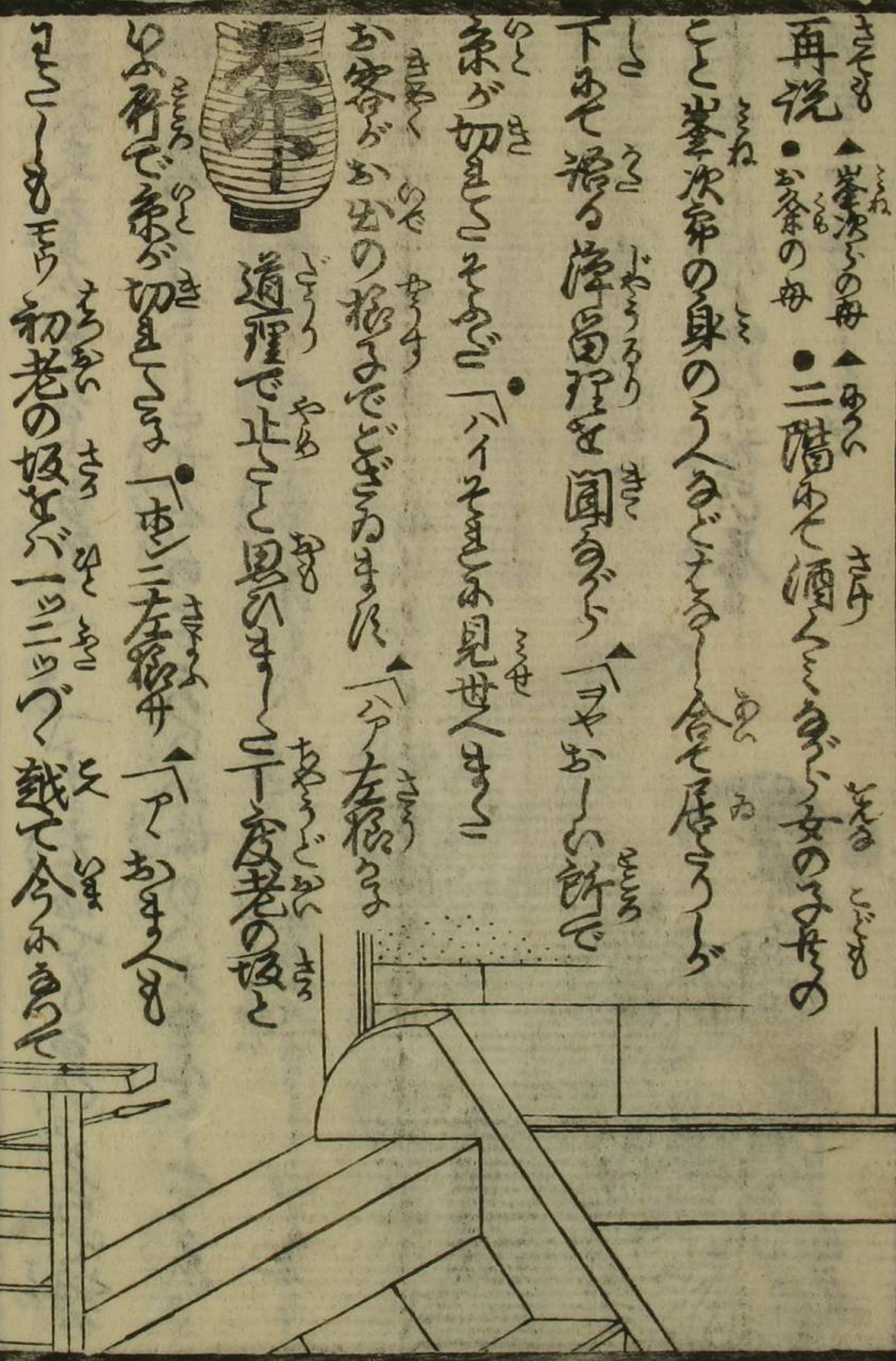
糸が切す アハ 見世し

お茶がお出の花をばいおまた アハ左様さ

道理で止しと思ひま アハ左様の坂と

り アハ アハ アハ

初老の坂 アハ アハ アハ アハ



このごころゆゑに西親のことをおのり出

ま アハ アハ アハ アハ

親のことよりうらみごころのま

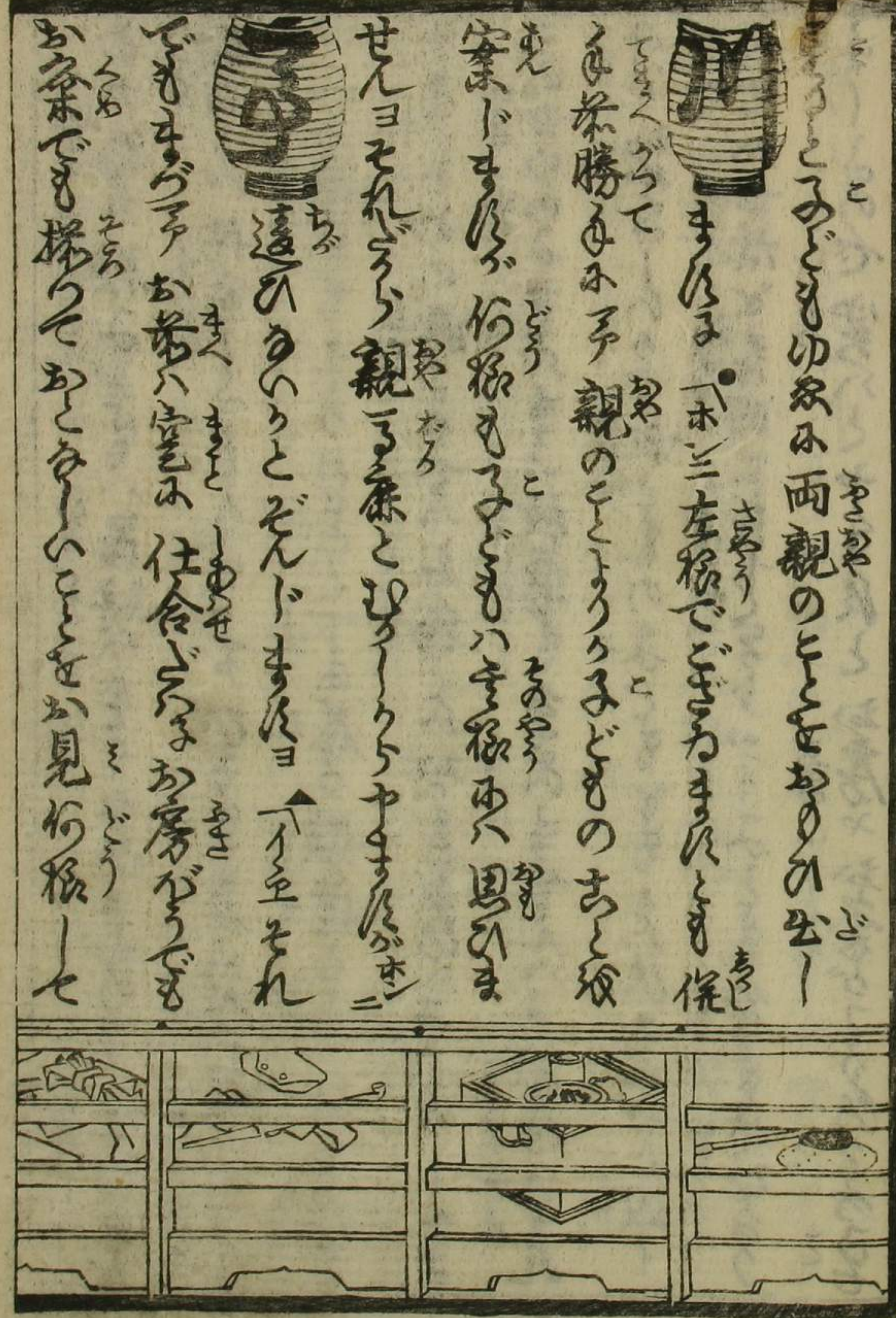
案 アハ アハ アハ アハ

せんヨそれらう親と兼とむうら

遠 アハ アハ アハ アハ

お茶 アハ アハ アハ アハ

お茶 アハ アハ アハ アハ



さういふの内端もあつたらうからと申すね
さういふ事次第もいふ事や思入小言をいふと思つて居る
いざ今一と見世事も客人の客入の客入は家へも寄つ
るものの子の所持もてものつらつらといふ左様と見
ると思ふお茶やお茶がめいひとていふ事やいふ事
宜みず苦勞一と申すせんかおのりも両娘とい
はれぬ所始と申すはかへもせむいふ事やいふ事
あても先刻の事とよく圓丸と申すは是非次第の事といふ事

但し親も両娘達も思ひのつらつらといふ事
度々勤者でもして仕舞へるのけさば私も旦那の
まを海をいふけと言ふ所が左様と申すは是非
と申す娘と申す事の毒なりホニモ多くおんごいふ事
いひ者もあつたと思ひもいふ事言ふと胸を痛めて
を細く他と思ふ身と思ふのや峯次第のいふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
情人の娘女の方ふ勤者を清く梅のこ意を地をいふ事
相の女定めて男の身を憐れ是非ともいふ事いふ事

左様ある時ハ二人の娘もまじしむを苦味させし由遊文のいふ
 のまじらば実情のお房お茶のふの意命も捨つふとさうい
 う兼もまじらぬの欲しものまじらぬふらうと胸を痛
 暫時言葉もさういふを捨してのやらうな **ナニ** 左
 様しと所が お茶とまじらぬ娘しむを困らせろ極まるの仕
 さひらうのいふく お茶まじらぬヨサアア申すも勝る一と
 一とお茶のふ **ハイ** 申す お茶さんとも **お茶** さんとも **お茶** さん
 ま——ト **お茶** さんとも **お茶** さんとも

第二十四

義理の柵と情のむらじ樂し〜海はなれば極喜もあれ
 西白くは只一とらうと九分の苦し身とせしむらうと
 互の實事も不実ともい 他見てもまじ極まるのふは然
 ともお茶房をいふ景の三女が思のくの苦味あつては
 さふぐのむ死止時き一とらうと苦味かと辨たすまはつたの
 友の傍より喜も地とさ海はなれば年人の思も今更らふ
 まいどくもさてもお茶とお茶入見世茶めを往來の人の思も

畫を好むに居るを女花ももまする美雅の笑顔のりく
 花の散る自然なる人ありて殊にお茶の頃女風とて姉
 るまじも賤しげなくお茶の元來位高き格あるはの世姑の
 好むを初少化格して女風往來の人ともまじりて見物さ
 二女と出でて初ゆ人ゆるく松うけまじお茶の塾の方へ
 向て怪奇俳諧の格の張まぜの格は張ゆるをまじりて
 居る書画の大人の會自のりく俳諧の題をまじりて
 月並の法條そのやう番附をて張てのり 京へまじられも奇

畫の畫よりその中をいひが一番格なり 京へまじりて
 畫の畫よりその中をいひが一番格なり

面白き鞠のうらまをておのりびも

ちうところけいりる寫の筆

桃江園主人

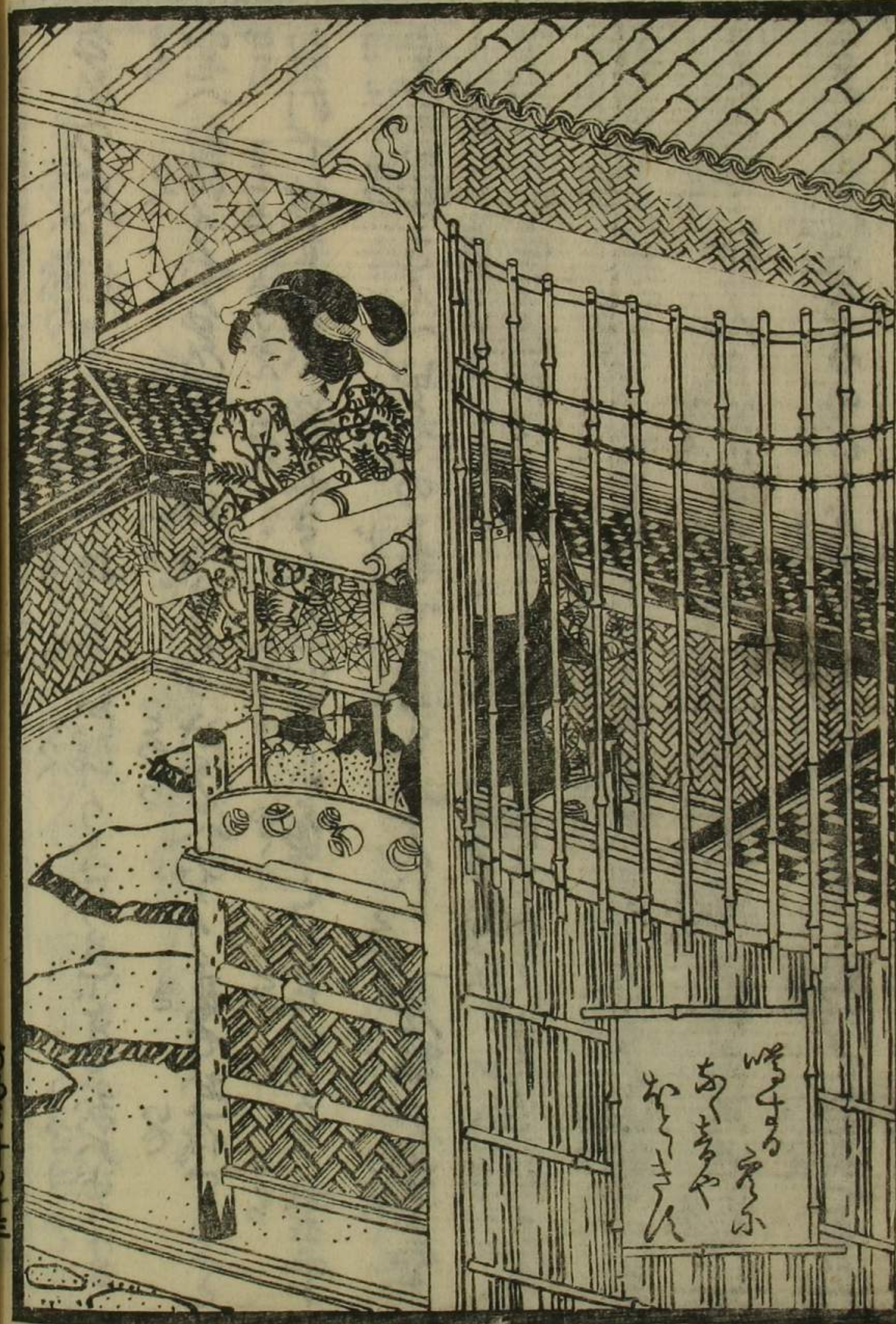
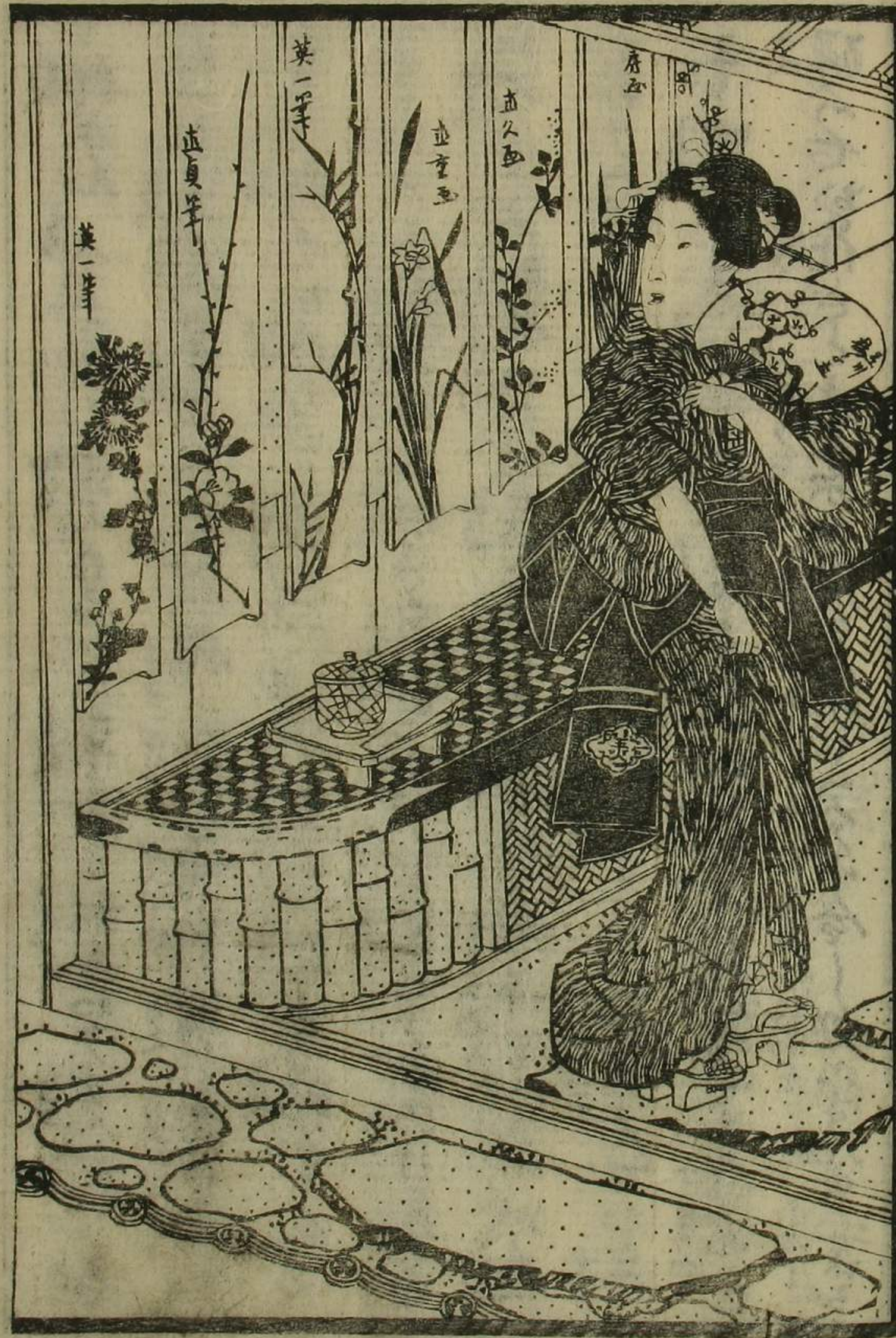
毎季奇雅な欄のものをお格ごて申 京へまじりて
 怪奇とお格ごて申 京へまじりて
 久しきにその文事まじりて申 京へまじりて

のびて 京「下」 屋敷をもちが似て居ると思ひしる画の件に入一画の
 美泉の子子の英一といふ人の画の七のみの家の國貞と英
 泉と算合書に「京」下「柳亭種彦」といふ名が書かれてある
 下「のびて」の字は「寛永」の「田舎源氏の作者が」縁ど
 のせ峯次郎といふが覺て居るとおもふ「三」は二十二年あると申
 上野山花の吹雪のころいへば

のびての字の論

峯次郎といふが覺て居るとおもふ「三」は二十二年あると申

まいごい 京「下」 三日中の折紙が解りしる「のびて」の字は「のび」
 宅へお解りせむのころ母はさんがお方へお入り申すと
 思ひておを當か姉とさんと同居の事とお言ひしる「のび」
 寛永の茶屋に入るとお母の毒で死なせんと 左様と申す
 先刻のお客達の信をいふ「のび」とおも申すも母はさんお終はる
 解らるけし入 京「下」 三日中の折紙が解りしる「のび」の字は「のび」
 せんが母はさんがお父はさんの書かぬを 弟は海をいとりておを
 りんでお仕るするの「のび」の字は「のび」の字は「のび」



幸ひのつらきほどを知らざる親婦母をよき縁より死すこと
 親類まの顔よごとしつらうえとありぬべし危ても有ても
 心を改めお京を本妻お房を妻と定めては身ハ尼ともあり
 ろん然もせざる時ハ相まひひ一生おんやまゐるまゝと思案を
 極めそのほどとも知らねばお京ハ猶彼尼とさきも膝まゝく
 縁合てき日ハ姑ともあるとも小柳川亭より本家お深より
 向ふ峯次第のつらき案ど七き初先を同尋ひつらふを所へ
 さぶし初人と心を脳し居らうけるは後お京ハ肯覚悟を極

母とお京ハ逢出せし七公達くも忍びやる小我家取たりりのを
 早くもせし就と居ひつら音を下し七他目を隠し尼寺さうて
 きまけり



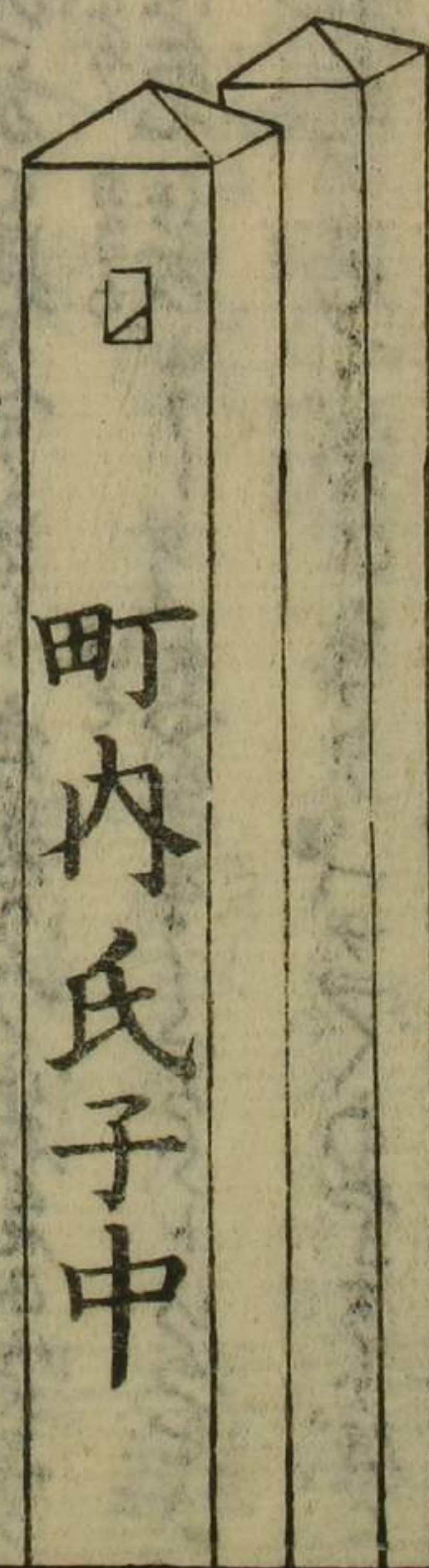
頃六月中旬ありけん小萩更なる町小路凍るは出
人々も臥戸み入るて門淋しく社来も絶る折あるは十四
五人の悪流が町の事戸隙より穿あつたり一サテくは三日早く
やううと仕舞ふもやねへうとんくは我がまけりや一ホニニ
マ五時とらふす。ヤしく鉄ヤイ地は方燈の梅を不殘枝て
まのやナ一馬信側へ投てあまらうと一然るそま下や
大方燈をうらぶサテく、油のある津ふやううせくと木
戸の上まうく組上大方燈の両側は二階の屋根の形う

軒へ星代のとくとくしら入るその両面へ仁田四布が犬猪
糸倒も画と富士の裾野の巻狩の仮家みうけ一紋を
さるのりりく画より一エヨウ今年画の國直と英泉の画
程のりて評判が佳す一そま六知まてさるヨ画の修好が遠
ハアナ一ちり地は方燈の役者の似負へ真重がうま
画とどやまのり國貞よりも佳くわぶ一然るは
あやう人情本の画も佳す一サテく形燈の紙下まで
程うく地上へもねへ先刺氷多賣があねあ

高きやぐるこが泥ぬ土つゆるるちやるるののろろ トたたくく太た丈ぢままじじ
 延のがのああててわわららちち ハ氣け配はいわわらら下さしし ハそそままじじにに ハツツ
トヨヨアア引ひりりのの風かぜががモモヨヨアアのの風かぜがが術じゆつ神しん薬やくととままじじにに ト時とき
ト分ぶんのの吹ふききてて見みええるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 強つひひのの七しち身みふふちち ハままじじにに ト身みふふちち ハままじじにに ト分ぶんのの吹ふききてて ト暑あつのの
 仕し舞まどどササクク ハ衆しゆう人にんがが働はたらかかるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 祇園ぎげんのの方かた地ぢのの跡あとととりり ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 送くるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの

明あるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 甚しくく脊せき後ごのの方かた地ぢをを見みるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 女め ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 方かた ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 然しか ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 甚しくく ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 舍せ ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの
 送くるる ハままのの ト日ひ中ちゆうのの風かぜがが吹ふききてて ト暑あつのの

て
 三三入がなまもき行入道行ける
 必竟此狼の安き大か何亦退き者
 何者ぞき妻一を起んとるふ次の巻を
 たまふ



町内氏子中

春色梅羨婦袷卷之十了

